

祖父母むけ公的プログラムのあり方に関する 論考：母親の”実家依存”との関連において

齋藤, 嘉孝

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

生涯学習とキャリアデザイン / 生涯学習とキャリアデザイン

(巻 / Volume)

11

(開始ページ / Start Page)

53

(終了ページ / End Page)

58

(発行年 / Year)

2013-09

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00009126>

〈研究ノート〉

祖父母むけ公的プログラムのあり方に関する論考 —母親の“実家依存”との関連において—

法政大学キャリアデザイン学部准教授 斎藤 嘉孝

1 祖父母むけプログラムと今日の世情

世間的にあまり知られていないかもしれないが、祖父母むけに行政（自治体）が実施しているプログラムがある。孫との関係性にかんして各種講義がなされたり、孫との体験事業などがおこなわれたりという、プログラムという名における、介入事業がおこなわれている。似たようなものでは、母親や父親を対象にしたプログラムが一般的には知られているかもしれないが¹⁾、その祖父母版といってよい。

近年の社会情勢を受け、こうした祖父母むけプログラムのニーズは十分にあると思われる。現在の高齢者たちは、かつてのような隠居した生活を送る“年寄り”のイメージとはちがう。むしろ退職してから（あるいはその年齢に至ってから）、第2の人生を謳歌する人たちである。趣味や習い事をしたり、旅行をしたり、友人と時をすごしたりする人は多い。孫や子世代との付き合いが生活のかなりの部分を占める人もいる。

しかし、世の情勢のめまぐるしい変化により、下の世代との付き合い方がわからない人も多い。孫と仲良くすごしたいのに、あまりうまくいかないという悩みもきく。また、孫と祖父母世代の間には、他ならぬ親世代がいるが、その親世代との関係に頭を悩ませる祖父母世代もいる。変遷する世の中において、現在の祖父母たちのイメージは、かつてのイメージとちがうことが認識されつつも、内実その祖父母世代という存在は、なかなか

か安定しないようにみえる。

こうした状況において、公的なプログラムというものは、一役買うことができるのだろうか。祖父母にむけたプログラムの現状を検討するのが、本稿の目的である。また、プログラムの現状を検討するためには、祖父母そのものの現状について検討する必要がある。とりわけ、変遷を続ける現代社会の家族において、子ども世代にあたる人たち（以下「親世代」という呼称で論じる）との関係性に注目したい。つまり、親世代（特に母親）と祖父母世代の関係性に注目して、本稿は今後への示唆をおこないたい。

2 祖父母むけプログラムの実態

祖父母むけプログラムの実態について、ここで多少の記述をしておきたい。筆者の調査した全国の市区町村教育委員会対象の悉皆調査によれば、祖父母を対象にしたプログラムは、全国に散在することがわかった²⁾。2007年の調査時点で、全国1,841ヶ所の教育委員会（2007年5月1日時点の確認）のうち、1,053票が回収された（回収率57.2%）。そのうち14自治体が祖父母むけの何らかの事業を実施していると回答した。

実施している割合は少ないように感じられるかもしれないが、まず、この調査は現時点でおこなわれたものではないことに注意されたい。もし現在調査をおこなえば、今日のニーズをふまえて、もっと多くの自治体で実施されている可能性があ

る。また、当時の調査は教育委員会のプログラムに限定されていたため、ほかの管轄部署によるものを考慮に入れていなかった（筆者は、今回の科学研究費の研究期間中に、あらためて現状を悉皆調査し、その変遷を追う予定である。また今度は、ほかの部署も含めてより包括的な調査をおこなう計画がある）。

こうした祖父母むけプログラムは一様に実施されているわけではないようである。つまり、祖父母対象であるということは同じであっても、そのコンテンツや要素は1つではない。筆者の現在までに入手できている範囲で、次のように整理してみたい³⁾。

まず、学校や保育園・幼稚園を中心とした行事のなかに、祖父母の参加を組み込むという、交流事業的なものがある。例えば、A県X町では、年間に数度の開催があり、ある回は祖父母が学校に孫の様子を見学しにきたり、ある回はいっしょに遠足するという名目で、課外に出かけたりする。そのなかで祖父母世代と孫世代が交流をもつのである。

また、何らかのテーマにおいての講話がなされることもある（例：A県X町、B県Y町）。そのなかには、子どもに関する今日の問題を扱うものもあれば、祖父母のあり方や孫とのつきあい方について扱うものもある。ただし、あまりに教育的な内容ではなく、あくまでほかの話のなかに祖父母のあり方を少しはさむぐらいが適度とされている。理由は、あまり説教っぽいやり方では、祖父母がいい反応をしないことなどが、インタビューから挙げられている。

これら以外に、母親対象のプログラムにおいて、参加者のなかに祖母もときどき混じっている、というものもある。ただし、それはプログラムの本来の性質ではないとみなされるため、本稿では祖父母むけプログラムには含めないものとする。そういった意味での祖父母の参加を、筆者は否定的に評価したいのではなく、あくまで分類において、祖父母むけプログラムとして扱えないという意味である。

いずれにしても、さほど多くの取組み例がまだあるわけではなく、あまり多くの実施形態が確認できていない。

なお、いずれも祖父母対象のプログラムを実施しているのは、市部よりも町村部が多めであるという結果だった。たしかに人口構成的に町村部のほうが高齢者が多いのかもしれない、そのぶん行政にもニーズとして感じられているのかもしれない。また、実際おこなった場合、参加者も町村部のほうが多めであり、人の集まりやすさという点で実施する意義があるとみなされる傾向にあるのかもしれない。実際、町村部では、人と人の顔の見えるつながりによって互いの参加が促されるなどの効果があることが、筆者自身のインタビューから感じられた。また、子育てに祖父母が関わっているケースも、町村部のほうが多いのかもしれない、この種のプログラムに興味のある祖父母たちが多いのかもしれない。

なお、こうした祖父母むけプログラムに関する研究は、ほぼ現存しないといってよい。そもそも祖父母対象だけでなく、母親や父親対象のプログラムに関する研究自体も、国内では少ない。米国では親むけプログラムに関して、その効果を数量的に分析するような研究が、それなりに存在する（例：Anderson, et al. 2002; Fagan & Stevenson 2002; Hawkins, et al. 2008）。この点で日米の間に、明らかな差異が存在していると考えられる。

日本では、親むけ・祖父母むけプログラムだけではないが、効果をシビアに検証することに、ともすれば何らかの違和感や抵抗感がもたれているか、もしくは軽視されているか、参加したことの満足感や参加人数、あるいはアンケートの自由記述だけなどしか、効果の考慮に入れられていないようにみえる。または、数値というものへの認識の違いだろうか。より曖昧な（あるいは深みをもって）言葉で語られることのほうが、評価されるきらいがある。しかし、事業の次年度継続などで、数値を用いて判断されることは行政現場でも確認される事実である。参加人数だけでない数値的評

価値も、もっと重視されるべきではないかと思われられる。いずれにしても、日本でこうした評価や効果研究が根づかない背景については、また別の機会に論じてみたい。

3 祖父母むけプログラムに期待される役割

祖父母むけのプログラムがいま求められている役割とは何だろうか。その点を次に論じてみたい。なかには現時点で実現できていないものもある。

まず、みえやすいところでいえば、参加者に楽しみを提供することがある。大きさにいえば高齢者の“いきがい”を感じる機会をつくる手助けをする役割といってもよいかもしれない。祖父母と孫の交流事業のようなプログラムであれば、それが開催されることによって、孫と関わる機会がつけられるのである。そこでは通常の孫との関わりとは違った場面で機会が設けられていることだろう。孫と自分たちだけでなく、孫の友人あるいはその祖父母も参加しており、ふだんとは異なる関わり方や時間の過ごし方ができる。学校や幼稚園・保育所などに呼ばれてイベントに参加するようなものが、例えばそれである。つまり、祖父母が孫と関わる大義名分を、公的なプログラムがつくる手助けをしているといえる。少なくとも「今度行くのが楽しみだ」「行ってみてよかった」「また行きたい」などの気持ちを祖父母に抱かせることができれば、この役割は果たしていることになるだろう。実際この点では、現存の交流事業的な要素をもつプログラムは、役割をこなしているように思える。

しかし、プログラムはただ楽しいだけの役割をもつのではない。先述したように、多少なりとも、祖父母のあり方や孫とのつきあい方などが講話に盛り込まれることもある。こうした「教育的・学習的役割」も今日必要とされているのではないだろうか（次節で再度取りあげたい）。意外にこの点は、なかなか実施されていないし、もっといえば効果を上げているかをしっかりした方法論で測

定していないのが実情である。

市販の書籍などに、孫との関わり方を知るための情報が掲載されているものがある（例：山懸・中山 2003；主婦の友社 2005）。しかし、内容の中心は、孫と顔を合わせたときにどんなふうにふれあうか、どうコミュニケーションをとるか、あるいはどんなふうになら孫を“教育”するか、などが多い。ようするに孫と祖父母の2者関係を論じるだけのものである⁴⁾。

たしかに孫との2者関係への思慮も必要だろうが、しかし、筆者はむしろそれ以上に重要なのは、自らの子（親世代）を含めた3者関係、さらにはその配偶者も含めた4者関係だと考えている。また、目前の関係性だけでなく、もっと長期的にみた関係性にも留意すべきだと考えている。実際、筆者は孫世代と祖父母世代の関係性には、その間の親世代の存在が大きな意味をもつことを実証したことがある（Saito & Yasuda 2009）。

ここで、岐阜県環境生活部少子化対策課の発行した50ページ強におよぶ「孫育てガイドブック」に注目したい（2012年3月発行）。正確に言えば、委託されたNPOが発行したものである⁵⁾。ここには、祖父母世代が孫と関わるために、親世代に対していかに配慮すべきかが示されている。いわれて嫌な言葉や、されて嫌な行動などが、親世代の視点に立ち、詳細に記されている。また、祖父母としての心構えのような事項にもふれている。

例を挙げれば、孫に与える母乳や食事などについて口出しをされることが親にとってどれほど嫌なことか、認識すべきこと。ただでさえせわしなく不安を抱えがちな子育てにおいて、できるだけ母親のやり方を尊重すべきこと。「まだ〇〇できないの？」といった言葉がけに、祖父母は大意を込めたつもりはなくとも、親世代は非常に傷ついてしまうこと。わが子でなしとげられなかったことを孫でなしとげたいがごとく、過剰な期待や教育をするのは慎むべきこと。孫に何でも買い与えればよいわけではなく、親たちの方針を尊重すべきこと。祖父母の「最大の仕事」として、老いていく姿をみせることが大切であり、老い・病氣・死

などを身をもって示すことが孫たちにとって大きな意味があること、などが挙げられている。

以上も抜粋でしかなく、こうしたメッセージはなかなか通常語られないが、しかし非常に重要なものである。単に、顔を合わせたときの孫とのふれあい方やコミュニケーションのとり方、あるいは孫への教育のしかたなど、すぐに思いつくような2者関係だけに終始していない点で、このガイドブックは注目に値する。

ここで筆者は、祖父母世代と孫世代の交流を否定的に評価しているのではないことは明言しておきたい。両者の交流によるメリットは非常に大きく、筆者自身も別の機会に論じたことがある（斎藤 2010）。代表的なメリットとして、祖父母側には、生きがいの高揚など、そして孫側にはソーシャルスキルの向上や養護性の醸造などが考えられる。ここで、そういった効果までも否定するのではない。そうではなく、祖父母世代と孫世代の交流をよりスムーズに実現するために、親世代への配慮が必須なはずであり、その点を祖父母世代はもっと認識すべきではないかということである（もちろん親世代に何も気をつけていないわけではないだろう）。

4 祖父母むけ教育的プログラムにおけるコンテンツの一例 ～“実家依存”について

本稿最後に、先にも出てきた、教育的プログラムにおけるコンテンツについて論じたい。とりわけ、今日の家族の特徴と関係して、祖父母への教育内容に盛り込んだらどうかと思われる事項について、である。現在この事項は、祖父母むけプログラムのなかではほとんど扱われていない（少なくとも教育的には扱われていない）。

それは、前節でふれた3者関係、4者関係に関するものの範疇だが、一言でいえば、母親とその実家の関係性についてである。子どもを持ってから急激に両者の関係が密になるケースがみられる。具体的には、母親が自らの実家を過剰に意識

するようになることであり（過剰に頼ることも含めて）、その一方で祖父母世代もまた、母親に依存していくことである。つまりは“実家依存”とでもいえる親子関係ができあがっていく（実際は共依存のようなものであろう）。

自らが親になった際、その親（祖父母世代）に頼ることはあるだろうし、祖父母世代も親世代に手助けできることはあるだろう——これも国や社会によってさまざまであり、少なからず全ての社会に普遍的な関係性ではないことにもまた注意されたい。ここで筆者は、実家に頼ることを全て否定するのではない。問題は、実家という存在が大きくなりすぎた状態で子育てがなされがちな現実と、当然のように密な関係を続けようとする母親とその実家の偏った枠組みである。出産のとき（里帰り期間なども含めて）から始まり、さまざまな場面で母親の実家からの援助を過剰に求める態度がみられる。若年層の精神的自立が問題になるなか、母親になってからも自立に欠けた人が多いのではないかと感じさせられるほどである⁶⁾。

注意したいのが、そこには、祖父母側からの過剰な働きかけも十分に関与していることである。ときには、母親が求めているのに、祖父母が過剰に手出し・口出しをしてきたりもする。時代も違えば、配偶者も違うので、自らのおこなってきた子育てがそのまま通用するわけではない。子ども（母親）の子育てを、もっと信用し、見守るべきと思いがたいケースが少なくない。

また、祖父母側は時間に余裕があるゆえ、いつでも会えるような姿勢でいるかもしれない。しかし、そこまで特に義理の息子（夫）は望んでいないことも多いだろう——これも、実家依存の状態にある実の娘（妻）にはわかりにくいことかもしれない。

さらにいえば（より重要な点かもしれない）こうした実家からの過剰な働きかけは「空の巣症候群（empty net syndrome）」という状態に関係している。つまり、子どもが大人になって離家し、急にぽっかりと何かを失ったような状態である。しかし、この喪失感を埋め合わせる要素は、

配偶者には十分でないケースがある。子どもの離家によって、配偶者と2人の生活に戻るわけだが、以前とは夫婦関係が違ってきている。子どもができる前と同じ感情は配偶者に対してすでに湧きあがらない（無自覚的なケースも多い）。そこで、埋め合わせのターゲットが孫にむけられる。孫の誕生を契機に、執拗に孫の世話をしたがったり、娘（母親）に声をかけ、手助けをしたがったりする。

娘（母親）も、そこで実家を制するほどの態度はとれない。むしろ、頼りない関係性である自分の父と母のことを（無自覚的にも）気にかけてしまう。

注意されたいのは、現在求められる父親の育児への関与である。父親はかつてのような“仕事人間”や“企業戦士”として生きるだけでなく、むしろ家庭において家事や育児をおこなうべきという風潮がでてきている。

そんな世情にもかかわらず、一面で母親（妻）は、夫に子育てを任せるよりも実家に頼んでしまおうと考える傾向にある。父親に家事を任せたり、仕事の都合をつけてもらったりするぐらいなら、実家に頼んだほうが手取り早い。父親（夫）も、家族のために職場で交渉する、という手間から逃げてしまい、職場にほぼ合わせた態度をとる。制度的には、家族のために都合をつけることが可能かもしれないのに、である。父親の育児休業取得や育児短時間勤務制の利用など、制度はあったとしても実質父親によって使われていないものは、多々みられる。

また、母親（妻）の実家からの執拗な働きかけもある。「夫はどうせ子育てに関与する余裕がないんだから、こちらに頼りなさい」とでもいわんばかりの態度である。

祖父母むけのプログラムでは、孫とうまくやっていくための、やりとりやコミュニケーションのコツなどを学ぶのもよいし、またいかに孫を“教育”するかを学んでもよい。しかし、それと同時に（むしろ、その前に、かもしれないが）こうした今日の風潮や親世代の事情、同時に自分たちの状況を、客観的に学んでもよいのではないだろう

か。今日の世情は、子育ての細かな担当事項や負担を、母親から父親にスライドさせようとする方向にある。父親がもっと自覚すべき部分もあるが、しかし祖父母がもっと（自分たちでなく）父親に任せる姿勢がないといけない。手や口を出し過ぎると、いつまでも父親が育たない。時間はかかるかもしれないし、職場との交渉なども簡単ではないかもしれないが、長い目でみて、父親にできることをもっとやらせてみたほうがよい。父親以上に時間的にも実質的にも関わっているような現在の祖父母のあり方は、時代に逆行していると思われる。むしろ後方から、まだ至らない父親を見守る態度が、現在の祖父母には求められているのではないだろうか。

さらにいえば、母親（娘）が直接の支援を求めてきたとしても、まずそれは夫婦の間で何とかできることなのか、もっと父親にやってもらえないのか、検討させる態度も必要である。

また、母親（娘）が本当に求めているのは、直接的支援を祖父母から受けることではなく、むしろ自分が気になくても「安定的に老後を過ごしていける夫婦関係」を保つことなのかもしれない。足りないものを下の世代に求める前に、祖父母自らの夫婦関係を充実させることが、娘や孫にとってまたとない貢献であるように思える。

具体的にどのような言葉づかいで、どのような設定において、本稿で論じたコンテンツがプログラムで語られるのか、筆者に喫緊のアイデアがあるわけではない。しかし、こうしたメッセージを可能な場面で発せられるよう、機会を探していくことは重要だろう。今後も祖父母むけの公的プログラムと、そこに求められるコンテンツについて検討する必要があるのではないだろうか。

——— 注 ———

- 1) 実際は、母親あるいは父親対象のプログラムさえも、一般的な認知はさほど高くないかもしれない。
- 2) 筆者が以前支給されていた科学研究費の研究

「親力」向上講座に関する実証的研究—ペアレンティングの取組みと参加者への全国調査」(2006～2007年度：課題番号18830067)による調査だった。教育委員会の家庭教育担当者に質問紙を郵送した。

- 3) 筆者が現在支給されている科学研究費の研究「親力」向上にむけた行政の取組み—父親や祖父母も対象にした包括的な親支援のあり方」(2012～2015年度：課題番号24730478)のヒアリング調査に多分に拠っている。
- 4) 既存の書籍の中にも、2者関係以外を論じるものはある。しかし、それが付け加え程度の比重であったり、目の前のことが主な論点であり、後述するように、長期的な関係性に十分に注目されていなかったりする。
- 5) NPO法人くすくすが、2010(平成22)年度に岐阜県から委託を受けて作成したものである。
- 6) 母子関係における、母と娘の関係性がとりわけ複雑な様相であることは、これまでの実証研究からもみてとれる(中西2009)。本稿は、単純に母娘の仲が良いからといって、全てが依存的であると指摘しているのではない。

引用文献

Anderson, E.A., J.K. Kohler, B.L. Letiecq, 2002, "Low-income fathers and "responsible

fatherhood" programs: A qualitative investigation of participants' experiences," *Family Relations* 51(2): 148-155.

Fagan, J., H.C. Stevenson, 2002, "An experimental study of an empowerment-based intervention for African American Head Start fathers," *Family Relations* 51(3): 191-198.

Hawkins, A.J., K.R. Lovejoy, E.K. Holmes, V.L. Blanchard, E. Fawcett, 2008, "Increasing fathers' involvement in child care with a couple-focused intervention during the transition to parenthood," *Family Relations* 57(1): 49-59.

中西泰子(2009)『若者の介護意識—親子関係とジェンダー不均衡』勁草書房

Saito Y., T. Yasuda, 2009, "An empirical study of the frequency of intergenerational contacts of family members in Japan" *Journal of Intergenerational Relationships* 7: 118-133.

斎藤嘉孝(2010)『子どもを伸ばす世代間交流—子どもをあらゆる世代とすごさせよう』勉誠出版
主婦の友社編(2005)『孫育てじょうず』主婦の友社

山懸威日・中山真由美(2003)『孫育ての時間』吉備人出版